田検小学校
ヒストリア　～歴史秘話～
第31号　（28.2.24）

～第３０号からのつづき～

◇　昭和14（1939）年，奄美市有屋地区に建設されることになった国立ハンセン病療養所の建設担当責任者となった武彦さん。

当初地元の人々は，その建設に反対しました。責任者である武彦さんも困ってしまいました。

１　病人の苦しみを説明し，住民を説得

武彦さんは建設に反対している人々に，ハンセン病で苦しんでいる人たちやその家族のつらい思いを，何度も何度も話し説得を続けました。

島（田検）出身の若い建築技師の熱心な説明をくり返し聴いていくうちに，建設に反対していた人々はしだいに国立療養所の必要性に理解を示し，有屋地区に建設されることに納得するようになりました。

２　残っていた杭・・・建設への大きな一歩

ある時，武彦さんは小学生の長男（渡博文さん＝現在の開運酒造・奄美観光ホテル会長）を連れて建築現場の測量（長さや広さを測る仕事）に出かけました。その日は，測量の基準となる２・３本の杭を立てただけで帰りました。そしてあくる日も長男の博文さんを連れて現場に出かけました。

「きのう立てた杭が残っていたら，地区の人々が療養所の建設を認めてくれた証拠だ。杭が抜き取られずに残っていてほしいが･･･」と願いながら，武彦さんは博文さんの手を引いて山を下りました。

武彦さんには心に秘めた熱い信念がありました。それは「島の人は，病気で苦しんでいる人たちを見放すようなことは決してしない。みんな同じ島人（しまんちゅ）として分かってくれるはず」という思いです。

山道もあとわずかとなった頃，木立の間から前日に測量調査をした場所が見えてきました。その時です。

「あったぞ！」。武彦さんは，つないでいた博文さんの手をぐっと握りしめ，声を上げました。

「博文，見てみろ。あそこに杭は残っているぞ。みんなは，分かってくれたんだ。」

こうして，多くの人々の理解と協力が得られ建設は順調に進みました。昭和18（1943）年４月，ハンセン病で苦しんでいた人たちは，新しくできた「奄美和光園」で安心して幸せに暮らせるようになりました。

３　木工所をつくり，机や椅子を製作

昭和20（1945）年，長い戦争が終わりました。奄美大島は日本から分離され，アメリカ合衆国の下で政治が行われるようになりました。島は戦後の混乱が続き，多くの建物が焼かれた名瀬の町には，小さなバラック屋が並び，人々の暮らしはいっそう苦しくなりました。日本ではなくなったので，国や県からの援助もまったくありません。県や役所のお金で建物を建てることもなくなりました。多くの学校が焼かれてしまい机も椅子もありません。子どもたちは，こわれた木造教室でりんご箱を使って勉強をしていました。

「子どもたちは生活が苦しい中で，勉強もできないのはかわいそうだ。よし，それなら自分が・・・。」

武彦さんは大島支庁の仕事を辞め，木工所を造りました。昭和23（1948）年，48歳の時です。木工所ですぐに机と椅子の製作に取りかかりました。それを名瀬の学校に配り，子どもの勉強に役立てたのです。

４　「建設会社」設立，そして「建築養成所」設置

その後，建設会社を設立。名瀬市内で初めて鉄筋コンクリートの郵便局が武彦さんの手で建てられました。武彦さんは将来を背負って立つ子どもたちのことも考えていました。

「島には大工が少ない。内地に行って技術を覚えるには金もかかるし，むずかしい。島に建築の技術を教える場所が必要だ。若者の大事な青春時代をむだにさせてはなるまい。島の発展のためにも，自分が持っている建築の技術を教えてあげたい。」

そんな武彦さんの情熱は名瀬市の人々の心を動かし，名瀬中学校に建築養成所が設置されることになったのです。そして週に２日，先生として若者たちに建築の指導を始めました。武彦さんは建築の技術ばかりではなく，人としての生き方も熱心に教えたのです。

５　学校建築と人助け

昭和28（1953）年12月，島民が長く待ち望んでいた奄美群島日本復帰がかなえられました。再び正式に日本となり，国や県の補助金で新しい学校が建設されることになりました。島にもどり建築技師として働いてから20数年が経過。今度は島の建設業者として，島内各地に鉄筋コンクリートの学校を建設することに力を注いだのです。

仕事のかたわらで，「よし，それなら自分が･･･」と生活に困っている人を自分の会社で雇ったり，働き場所を紹介したりしました。また，心がすさんだ中学生を親代わりになって育て，授業参観などにも出席し，立派に中学校を卒業させました。

昭和41（1966）年，長男の博文さんが観光事業を立ち上げたのを境に建設会社を閉じ，田検にもどりました。今から丁度50年前，武彦さん66歳の時でした。

６　生まれ故郷の田検にもどってからは・・・

島の言い伝えや民話などを調べ，昭和53（1978）年『親がなしぬしま』という本に書き残しました。その後も『焼内ぬ親がなし』『島唄と諺は往時の教訓』を発行（村図書館所蔵）。また子どもの健やかな成長を５月５日に集落民で祝う「端午一心会」や共同墓地「精霊殿」も，行動力のある武彦さんの発案です。

武彦さんは今，田検「精霊殿」の一室で子どもたちの事を思い続けながら安らかに眠っておられます（没後26年目）。

【銘板にはユーモアを含んだ一文が】＜文責：福田＞

当分の間　満室につき　ご入居をお断りいたします
ただし９９歳以上のお方は　特別にお取り計らいいたします
田検極楽マンション　ＴＥＬ５９ら９
昭和47年7月吉日　渡　武彦　書